



つながるための「言葉」を獲得する

生徒の未来につながる「言葉」を育てる高校事例

Case Study

Case 1

身近なことから世界の時事問題まで 幅広い外国語教育で生徒の視野を広げる

生徒の未来につながる 「言葉」を育てる高校事例

英語を中心とした外国語に関する学科や、国際関係に関する学科を設置している高校は少なくありません。学校設定科目などを通じて、各学校で取り組んでいる独自の外国語教育について、背景や目的、生徒たちの「言葉」との向き合い方や成長について取材しました。

坂戸高校（埼玉・県立）

実用的な英語を使う機会を
多様に設ける外国語科

埼玉県内に8校ある外国語科を有する公立高校の1つである坂戸高校。目指す学校像として「文武に秀で、地域に愛され、国際感覚を持つ社会のリーダーを育てる学校」を掲げる同校では、外国語科だけでなく普通科も含めた全校で、国際理解教育に力を入れている。外国語科の設置は1992年。各学年に1クラスのための3年間クラス替えがない。

「生徒同士や生徒と教員の関係性が密になるので『お互いに思いやりをもって過ごそう』と生徒たちに言っています。そのことで、発言しやすい安心・安全な環境が育まれていきます」（国際理解教育部主任・堀江舞衣先生）

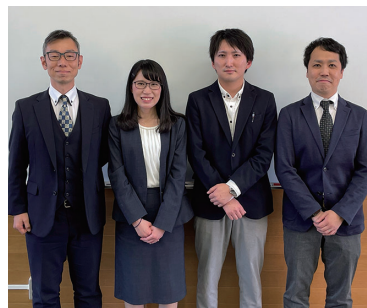
外国語科では、英語の基礎的な4技能5領域の習得はもちろん、第2外国

語として英語以外の言語を学んだり、図1のようなさまざまな専門科目で実用的に語学を学んでいる。

「生徒たちには、英語を学ぶだけではなく、英語で多様なことができる力をつけてほしいと考えています。語学系や国際関係学部に進学する生徒が多いですが、看護や福祉、教育など進路選択はさまざまです。海外のニュースなどを授業のリソースとすることが多いため、生徒たちの視野が広がっていくようです。授業が生徒たちのやりたいことを見つけるきっかけづくりになっているのです」（外国語科長・前田英之先生）

生徒の視野を広げるための科目の1つが2年生の「異文化コミュニケーション」だ。世界の文化・社会・価値観などを英語で学んでいく。

「他文化を知るには自文化を理解する必要があります」と考えています。異文化



写真左から、廣瀬純一教頭、国際理解教育部主任・堀江舞衣先生、英語科教科主任・嶋津昌樹先生、外国語科長・前田英之先生

コミュニケーションの授業では、まず自分自身について英語で考え、アイデンティティを知ることから始めます。例えば、Step to the lineゲームという、さまざまな質問に答えていくゲームを通じて、自分と他の人の考え方の違いを知り、身のまわりにある他文化を探すことで、偏見をもたずに他者を見ることを楽しく学んでいきます」（英語科教科主任・嶋津昌樹先生）

図1 外国語科の専門科目

科目	1年生	2年生	3年生	内容
総合英語I～III	●	●	●	4技能を段階的に学習
ディベート・ディスカッションI	●			論理的思考力を養い、英語で議論を行う
アカデミックイングリッシュI・II		●	●	発表ややりとりを通じて実践的に英語を学び、最終的に卒業論文執筆およびプレゼンを行う
異文化コミュニケーション		●		世界の文化・社会・価値観などを英語で学び、ディスカッションなどを通じて考えを深める
グローバルスタディーズ			●	ニュースや新聞を通じて、世界で起こっているさまざまな時事問題を英語で学び、高度な英語力を身につける
第2外国語		●	●	中国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語のいずれかを選択

アウトプットの機会が多く 楽しみながら生きた英語を学ぶ

外国語科には2名のA・L・Tが常駐。いつでも生の英語を試せるなど、学んだことのアウトプットの機会を多く設けている。

3年生の「グローバルスタディーズ」の授業では、英字新聞や英語ニュースなどリアルな素材を用いてコンテンツベースで世界の時事問題にアプローチする。学んだことをアウトプットするために、生徒たちが自分で関心をもった題材でオリジナルのニュース原稿を作り、キャスターになりきって英語ニュース番組風の動画を撮影して発表している。内容はフィクションでも良いとしており、生徒たちが楽しんで英語を使っている様子が映像からうかがえる。

授業で身につけたことは、学校内外のスピーチコンテストや英作文コンテスト、ディベートコンテストなどへ出場することで、さらに磨きをかけている。

3年間の集大成としての 英語の卒業論文

スピーキングやライティングの力を系統的・総合的に養うための授業が1年生の「ディベート・ディスカッションI」と、2・3年生の「アカデミックイングリッシュ・II」だ。クラスをチーム分けして少人数制で「書いては話す」を繰り返していく。

1年生ではプレゼンテーションや自

分たちでストーリーから作る英語劇を通じて、論理的な思考や自分の思いを伝える表現力を身につける。2年生では社会問題などをテーマに自分の意見の発表やディベートを行う。その集大成が3年生の卒業論文だ。自分の関心事をテーマに英語で論文にまとめ、さらにプレゼンシートも作成してクラスの前でプレゼンと質疑応答を行う。

「生徒たちは3年間の多様な専門科目を通じて、英語の表現方法など技能から、世界にあふれる社会課題まで、たくさんのことを吸収していきます。その吸収した成果を自分の考えという形で発信する場が卒業論文なのです」(堀江先生)

「外国語科の卒業論文とは別に、総合的な探究の時間でも研究・発表を行っています。外国語科の生徒たちは日本語での発表の組み立てもうまいです。日頃から考えを言語化してまとめる学びが多いため、日本語能力も相乗的に上がっていくと感じています」(嶋津先生)

全校生徒を対象に、多様な 国際理解教育を実施

坂戸高校では、外国語科だけでなく普通科の生徒も含めた全生徒の国際感覚を養うために、オーストラリア研修や、外部講師を招いてのグローバルセミナーなど、さまざまな国際交流事業を行っている。

オーストラリア研修はホームステイ

図2 外国語科の学校設定科目の取組の一部

アカデミックイングリッシュ

論理的な思考を身につけ、自分の考えを英語で話したり書いたりする表現力を身につけ、3年生で卒業論文を書いて発表する。



1年生は「ディベート・ディスカッションI」で、自作のストーリーの英語劇などを実践。



卒業論文のプレゼン。質問する側も英語なので、仲間の発表を理解し発信する力が求められる。

卒業論文は冊子にまとめられる。テーマは環境問題から、癒しの方法など多岐にわたる。



グローバルスタディーズ

3年生の「グローバルスタディーズ」ではCNNの教材などを使って世界の時事問題をリスニング、リーディングで学び、学んだ内容をディスカッションして自分の意見をまとめる。最終的に、自分たちでオリジナルのニュース動画を作成する。



自分たちで作成した英語のニュース原稿を、キャスターになりきって話す動画を作成。



ニュース映像には英語での街頭インタビューなども盛り込むなど、生徒たちの工夫が見られる。

しながら現地の学校の体験授業を受ける。コロナ禍で停止していたが今年度から再開し、希望者対象で今年度は25名の生徒が7月に2週間渡豪する予定だ。外国語科からだけでなく普通科からも応募があった。

グローバルセミナーでは外務省やEU、JICAなどから講師を招き、世界

の現状について生の話を聞く。

「世界情勢を知り視野が広がる体験は、進路選択の幅を広げるので、普通科の生徒たちにも必要です。世界に通じているさまざまな大人の話が聞けるように、講師選択は我々教員がアンテナを張って探し、直接依頼をしています」(堀江先生)

す」(堀江先生)



つながるための「言葉」を獲得する
生徒の未来につながる「言葉」を育てる高校事例

図3 国際理解教育の取組



昨年度のグローバルセミナーでは、学習院大学の富田祐一教授を招き、海外の大学の経験や英語学習の意義について語っていただいた。



30年前から実施しているオーストラリア研修。ホームステイながら異文化を生で体験(写真は2019年度の活動)。

Students' Voice



2年生
新井聡馬さん

言語だけでなく新しい価値観に触れられ、成長の機会が多い!

本当は英語が苦手。それでも、外国語科に入ったのは、海外企業との仕事をしている父や叔父から「通訳を通すとうまく伝わらないこともある。自分で英語を話せた方がいい」と、日頃から聞いていたためです。それで英語をがんばろうと思いました。

がんばりたい気持ちはあるものの、もともと苦手なので、語彙を増やすために単語を覚えたりするのは大変です。でも、ALTの先生と会話して、覚えた単語を使って自分の言いたいことが伝わったときは、本当に嬉しいです。

将来はペットの看護関連の仕事に就きたいと考えているのですが、ペットに関する文化や法制度、教育などは欧米の方が進んでいます。自分がそうしたペット先進国で学んで、日本に知識を還元したい気持ちがあり、そのためにも英語をもっとがんばりたいです。

うちの科は異文化について学ぶ授業が多く、今まで知らなかった価値観や文化に触れることができます。また発表の場も多様にあることで、内向的だった自分が、街で会った知らない外国人の方と会話できるほど積極性が身につきました。3年間クラス替えがないため、お互いを思いやりながら共に成長していけます。そうした成長の機会に恵まれた環境が気に入っています!



3年生
早坂百代さん

英語を話すために日本語の表現も考え、思考の幅が広がった

中学生のころから将来は英語教員になりたいと思い、英語教育に力をいれている本校の外国語科に入学しました。

ALTの先生とコミュニケーションを取る形式の授業が多く、トピックに添って自分の意見を書いたり、自分でストーリーを考えたりオリジナルの英語劇を演じたり、4技能を満遍なく伸ばすことができていると思います。英語に関わらない日はないくらい、英語に触れる機会が多いことが一番のメリットです。土日は家で洋楽を聴いて、歌詞の意味を考えたりしています。

第2外国語はスペイン語を選択。みんながワイワイしていて、発言や質問がしやすい雰囲気が入りました。複数の言語を身につけられれば、たくさんの国の人とコミュニケーションできるようになれそうで嬉しいです。

外国語科に入って、英語力だけでなく、コミュニケーション力が上がったと感じています。英語が話せるようになるにつれ、伝えたいことがたくさん出てきました。英語を話すときに、まず「日本語ではどう表現するか?」を頭の中で考えるようになり、日本語の会話のバリエーションや思考の幅も広がってきたのです。そのことで、英語以外にも人と会話することが楽しく、コミュニケーション力の向上につながったのではないかと思います。

身につけた思考力や発信力によりよい世界を創れる人材に

教室の内外で多角的に学んでいる外国語科の生徒たちは、語学力だけでなく、思考力や積極性など自身の成長を実感している(左記参照)。

「外国語科に来る生徒が必ずしも英語が好きで得意とは限りません。しかし、『英語を話せるようになりたい』と志をもって入学した生徒たちが楽しみながら、自信がもてるようになる授業を目指してきました」(嶋津先生)

例えば、リーディングの教科書で扱っているトピックは難しい題材が多いことから、最初は生徒にとって身近なスマホ

やSNS、マンガなどの話題から入る。

すると自分の興味があることを英語で伝えたいという気持ちがわき上がり、生徒たちは自ら学ぶようになってくる。

「我々英語教員は英語が好きなので、つい難しいところから入ろうとしてしまいがちですが、生徒の興味とは違うことをいっても肝に銘じています」(嶋津先生)

「AIで翻訳が簡単な時代に学校で英語を学ぶ意味は、『伝わった』経験で次のことにチャレンジしたくなる意欲

を育てられることだと思います」(堀江先生)

「英語さえできればよいわけではありません。生徒たちの主体性や学びに向かう力も育てたい。カリキュラムは緻密に組み立てつつ、授業では教員があまり口出しせず生徒の自主性に任せたいです。ただし、生徒の小さな変化を見逃さず、スイッチを入れるタイミングだけは外さないようにしています」(前田先生)

田先生)

外国語を学ぶことで、生徒たちにどんな成長があり、今後どんな人材を送り出したいか、教頭の廣瀬純一先生はこう締めくくった。

「1つの外国語を学ぶことで、世界を見る窓が1つ増えます。窓が増えることで昨日まで見えていた景色が変わり、視点が変化した生徒たちは発想が変わっていきます。こうした若者たちが新しいことを創りだし、世の中に変化を起こしてくれることを期待しています」

学校データ

1971年創立／普通科・外国語科／生徒数1056名(男子530名、女子526名)、1992年に外国語科を設置以来、普通科も含め多様な国際交流事業を行うなど、国際理解教育に力を入れている。